(1)

星

聞

卒業おめ でと

第7期生

らくないでしょう。だから、たとえ皆さんが授業に遅れたり、勉強 いたとしても誰もそれを問題にしないと思います。また皆さんの礼 にあるような補導部や担任の先生が定められてるような組織はおそ ものになるととと思います。皆さんが入学する大学に於ては、洛星 れからの生活は洛星における今迄の六年間の生活とは非常に違った 皆さんはまもなく洛星を卒業し大学へ進学しますが、皆さんのと



的成長は、ミサイルやロケットにもたとえられます。機十、 るばかりで、云わば、わがままな生活、本能的な生活に落ちてむよ ばなりません。人間が努力を止めるならば、ミサイルのように落ち 派な事業を行なっためには、大きな精神的エネルギーを出さなけれ すぐれた人格を創りあげるため、或ひはすぐれた研究やその他の立 ンもあるミサイルやロケットを地球の引力にうちかって数十キロの一オズと、終りになるにつれてワイ 欲望にしたがって生活するには努力はいりません。しかしより良い 必要としません。人間もそれと同じことで、勝手なことをし、唯、 速力で走らすためには、なんと英大なエネルギーを必要とすること ないと案外早く失なわれてしまうことがあります。自分自身の人間 う。長い時間をかけて努力してつくりあげた良いものでも気をつけ とですが、それは、人間的成長についてもいえることでありましょ こともあまりないと思います。これからは監督され注意される でしょうか、しかし、それが地球へ戻るためにはエネルギーを全然 は僅かしかかからないのはスキーで滑走を楽しむ場合に経験するこ は、もつほとんどなくなり、そのため皆さんは解放感に酔って いように注意して下さい。登りには時間がかかるが降りて来る時間 いと思います。また、洛星で身につけた道徳心や良い習慣を失わな し皆さん、この新しく得た自由は濫用しないように気をつけてぼし

も病気を起してしまうものです。不規則な生活に陥いり、安息 通り、不規則な生活はまつ体を害しますが、それに加えて精神的 則な生活の結果、まつ体が壊わされつつあります。」この人が云う たが、も早や人生は退屈なものとなってしまいました。そして不規 から遥かなる道を歩いて行く皆さんの行く手には幾つもの入生の陥 活を好むようになれば、精神はやがて死を招いてしまいます。これ は有名な俳優になることができて使いきれないほどの財産を得まし 或る有名な俳優が次のようなことを語ったことがあります。「私 るでしょう。楽しいことがあった 々たる前途が開けている。その道 れるでしょう。 ときにも洛星を思い浮べて下さ い。洛星の先生方や、友人たちは 星の生活を思い出して下さい。き しいとき、辛いときがあったら洛 きばかりではないと思います。苦 きっと君達と一緒によろこんでく一き合いは二年ほどでしたが、ずい っと諸君に何かを与えるものがあ を進んで行くには、決して楽なと

とはとのようなものかと思いま な年令には達しておりませんが)

皆さんとの直接担任としてのつ

す。華やかな結婚式を前にして、一て、諸君に教えたことより、

大な業績でした。私は教師とし

より

新連(洛星新聞

花嫁を送る父親の気持(まだそん)多くのことを諸君から学んだよう

法、言葉使い等の良い習慣は決して失なわないでほしいと思いま 私が皆さんに云いたいことは、此の学校で得た道徳心、

それでもやっぱり高三の担任は、

何度か洛星の高三を担任して、

な感じがします。ずい分勉強しな

もあるし、素直でほんとにいい子

い奴らだ(失礼!)と思ったこと

分長い間一緒に生活してきたよう

的な行動は徐々に姿を消しつつありますが、まだ多少は「アプレ れようと、他に染まる必要はありません。皆さんがこの学校で得た することがあるかと思います。しかしそのような場合、たとえ他の 的」無規律な状態が残っている面も見受けられます。皆さんは卒業 身に対して誠実である心を持ち、胸を張って前進されんことを希望 た立上って、投げやりにしない心、絶望しない心、あくまで自分自 キリストが十字架を背負われ、ゴルゴダへの道を歩まれたとき、キ いということに自覚をもって行動していただきたい。そしてみなさ「せわしすぎるようです。でも、も」 徳は人間の持つ本然的姿であり、それは決して時代遅れのものでな 後多かれ少なかれ、社会的或いは対人関係において無規律な面に接 んの毎日の行動が、このようなバックボーンにもとづいた自信のも 人と異った観念、行動であろうと、また人からそれをいかに批判さ 現実の日本には戦後青少年達に一種の流行のように広がった頽廃 てでした。その点、僕は少しも悔 う君達の姿がとの学校に見えなく 口では言っても、どうも実態とし ものとなりました。今となって、 らえようにも、お互いに、 て飼いて来ません。実感としてと 勿論、高三を卒業させるのは担任」ばかりだと感じたこともあるし、 た。しかし、この二年間の君達と なるという現実は、のがれられぬ しんざい。ものだと思いました。 いる所がありません。それだけに、せた、全学年の心の結晶をもみる一いたします。

君達と一緒に、胸をふくらませ

ろに響きかえって来た日。……

去年の春「最高学年とそが、学」れにゆく所ではありません。自ら

り上げて行った日。心をこめて話

た日。議論に議論を重ねて劇を作

日を浴び乍らソフトボールに興じ

よく元旦を迎えた日。暖かい春の しかけて、知恩院の鐘の下で元気

高Ⅲ A担任 方登

編集局

機作法・言葉使い・服装などについても誰かに注意を受けると

京都市北区小松原南町 丁EL⑩2334

ルバムにもましてなつかしい想い「うとしている。しかしこれがすべ」め、そして悩め。 の卒業配念アルバムが積まれるこ とこの四冊目のアルバムはどのア ざやかによみがえってくる。きっ とになる。そのどれをひろげてみ ても、その時その時の想い出があ

ワイガヤガヤと、しかしとにかく 楽しかった、面白かった。まさし この一年、はじめはお互いにオズ あっと言う間に過ぎてしまった ないのだ。

と言われる学校を出た人の間では、ち続けることを念じつゝ。 うようなことが、えてして名門校 人生のクライマックスであるとい

で行ったような一年だった。

高ⅢB担任

この学年がある意味で型破りの|よくある現象である。

以上の跨りは他にはないだろう。 りに思っている。この学校でこれ に粉砕してくれたことを心から誇 あるとかいう世評を身を以て見事 らいたい。若年寄りになるな。悟 ってまともにぶっかって行っても

。大学に入学した時がその人の

学年であり、そして君たちがいろ一長平沢興) いとぼくは確信したい。若さと夢 人生に対して、君たちの全身をも 君たちにはそのようなことはな

田のページをのこしてくれること一ての終結完成であってはならな 新らしい輪を完成させるために、 君たちは更に前進しなければなら 一つの輪は後数日で完成されより切るな。それよりも、更に苦し については今更何も言うことはな 後数週間後にせまった大学入試

した。そしてぼくも及ばずながら できるだけのことをしたつもの一出口が目前にポッカリと大きな口 い。君たちはできるだけのことを

までも君たちの心に美しい光を放っかが思い出と だ。それでもう充分ではないか。 との学園ですごした日々がいつ

人の仕事ではなく、洛星の先生| それが精神的にも学力においても す。特に高三における運動会、文にみえたその頃。科外活動に手を メキメキと成長して、その力強さ に一つの時代を築くと思われる偉 に圧倒されている今日この頃で は、現代の高校生としてのあり方 化祭における一致した団結と活躍 頃。高校生が近より難いほど崇高 る機会が多くなり、他校との比較 において洛星のよさを認識すると でくる。 …… 寺西という補導部のコワイ先生

とう。さあ、君達の目の前には洋

巣立ってゆく君達を見送りながら なって、これから大学へ、社会へ

とれだけでよかったかなア、 してやることはなかったかな

卒業生の皆さん、御卒業おめで

住

すが、いよいよ卒業生を送る段に

万全部のお力によるものでありま

苦しい時には徹底的に苦しみまし」ような喪くしさ尊さは、永く学校|はいいところだった。」 という感 もう一度君達におめでとうをいい と私は信じている。そして、私は う。さしあたって大学の入試にも えた大力年の学力とファイトをも の伝統となって育くまれてゆくこ 君達は必ず立派な成績をあげうる の式である。さあ、洛星でたくわ 卒業式は終りの式でなく、出発 第一歩をふみ出そをつけるな。」 て一段とまとまった高二の後半かないか。 屋といわれた数カ月前のこと。あしいう信念をもって力強く歩もう ら卒業までの一 情をいだく今である。 らゆる思いが一 徒総会で発言し 年半。「壁に足跡 つになって「洛星」ではないか。

長い間おさわがせしました。 さようなら。

卒業おめでとう。……と、とう

摩周湖の霧がものの見事に晴れわ に喜こんではしやき回りました。 た。たのしい時には、赤ん坊のよう

えながら、さぞ苦しい事もあった とでしょう。受験という重圧にた

でしょうが、。高校生として本当

に意義ある生活を送ったものだけ

たり、小躍りして走りまわった日、

踏まれた日。『おはら参り』にお

"カンジラス"とやら申す怪物に

木村 観

高ⅢC担任

「くたばれ秀才」

した言葉が、単なる音となって空| 君達に、僕は心からの祝福を送り に勉強してとおして単立ってゆく の一つであるはずです。。出来なは、今の時代に最も望まれること が、立派に進学して行くのだ。と いう事実を確立させるということ たいと思います。大学は、教えら い学年、といわれながらも、立派 ると仮定するならばそれは私が入目に涙をためて歌っていた幼ない ちっぽけな価値でも持つ事が出来一霊的陶酔を感じ、清らかな聖歌を 試にバスした時であろうと信ず」ぼくでありました。 としている。 私は今ある事柄について書こう | 宗教研究の日々でしょうか。あの 吾

する方策があるはずだと思つ。そ
在意義はもっと高い所にあるはず の方策とは「人 々のように秀さ に大学入試というものがある。 ところで俗 我々学生が常 イでない者でもパス てしまわないためにも。 洛星の存 にいう一流大学に我一洛星が単なる受験の名門校に堕し 作に悩まされるもの 一倍勉強する」と一である。

出しきって、のびのび成長して下

洛星は 芦 いい所」 田

に

際

現在が過去に

ってからもつ六年、今や卒業といととか、「秀才は勉強せよ、そう ている。六年間の喜怒哀楽のいく を開けて、私の通るのを待ち受け う遥かな彼方の幻であったはずの であった入学式という入口をくぐ く現在という地位を獲得する一連 なって心に浮かん。校の中にそれを養う運動部を作り かって現実のもの なく繰り返されて なり、未来が新し にかじりついている間に精神力を 一でない者は中学の時ぐらいは運動 する精神力の弱い者がいかに多い いった様なつまらぬ事ではない。 割を占めると言われる。彼ら、天 いくら勉強したって秀才に及ぶは 養うのだ。それには自らの手で学 をやれ。」という事だ。秀才が机 才肌の人間には細かな事にも動揺 幸いにも入試には精神力がその三 人倍やっているではないか。だが ずがないし、又秀才諸君だって一

時が経過する。

半、十日間の北海道旅行から帰っ。それも精神力を試すよい機会では 体)が左に傾いているから脱退しやる者は勉強と運動を両立せねば 広げてゆくに従って他校を訪問すが後に大いに役立つにちがいな ようとして大騒ぎをした高一の後ならぬ所に苦しさがある。しかし との多かった中二・中三の頃、京 に何回も黙想をさされた中一の一たら運動部に入って死ぬ思いで練 の加入している団 のでないという事である。 運動を たくない事がある。それは入試が よってはぐくまれる体力と精神力 習をやってはどうだろう。それに い。学校の成績がよくないと思っ 学力を試すもので精神力を試すも 上げる事だ。特に中学生に言いた い。もかしここで誤解してもらい

ち振って踊った昨秋の運動会。生ていい。さあ俺らだって秀才とい ーに足跡をつけて叱られた一年であるために私はどうしても大学 しすぎたために総会一うつまらぬ動物には負けないんだ 日の丸の小旗を打に入らねばならない。浪人したっ との注意のポスタ間である。ここで述べた事が真実 私は人に負けるのがきらいな人

「洛星に望むこと 石沢立道

だがこの文章がもし一冷え冷えとした神々しいムードに くの思い出といえば、中学時代の 包んでしまいます。洛星らしいぼ ました。思い出はすべてを美しく 短かくも又長い六年間ではあり

の特色を強くだすべきでしょう。 徹底し、カトリックの学校として 洛星としてはもっと宗教教育を

ハンドして 大門夏日

ような事があれば、多くの先輩の

や同じ学年のものが「もっとクラーだ。クラブ活動をしていて一人で ブを二次的だといっている人がは 音から人はいう。そこでクラブ 後までやったからだ。多くの先輩 は二次的であるという人に一度聞 が誰にはばかりなく自慢できるの一どうのころのと口先ばっかりゴター のを聞くが、後悔先きにたたずと (運動部) について話してみたい し思う。クラブ活動というのは若 いと思っているのだが、クラ ぼくらの若さだけだ。クラブ

た事があるのかどうか。 勿論クラブの必要を全然認めな るが)でも必死になって、練習 して一ケ月(一ケ月では短かす クラブでもいい、ぼくはハンドボ らないからだ。とにかくやってみ かどうか試してみる事だ。どんな わない、何故なら他のクラブを知 ール部が一番いいクラブだとはい

思えてくるのはやむを得ない事 それは一次的なもの以上のもの や倫理で学べないものを学んだ。 ない人間の方便にしかすぎないと成功のみを望む、諸君ハッスルせに一つの、所謂思い出というもの る人にあった事がない。とすると 次的だといって一生懸命やってい しんどいことするのやろう」と思 たといってもいい。二次的だから 次的というのは、クラブ活動し 屈で学べないものを体で学んだ ている人もいるだろう。しかし 人もいるだろう「何んであんな 今まで残念ながらクラブを二 一次的なものの穴をつめるる。諸君ぼくらは若いんだ。ファ らやってみる事だ。ぼくらは若い あ、楽しい洛星生活をすごしたま も真剣にやってみればつまってく らん事もやってみる、つまらん事 望むから憶病になる。億病だから イトでゆこう、ファイトで。じゃ からやり直せばいい。成功のみを ればいい。結果が悪くても悔やむ た事があれば、誰にはばからずや できない。好きな事、いいと思っ ない、いい結果のみを望むと何も やりもせずにいい結果を望め

ある。洛星の追求しているのは純 粋な人間の接触ではないのか。純 一我が六年の始末記 革島

2

6 粋な人間の接触を追求しないもの 書いてみた。 星から追放される事となった。ま

蛇足ながらハンドポール部にい

あったが、とても楽しく中学、高一てもだめだったらやめればいい。 洛星を卒業するにあたって、補一度一ケ月でいいから試しに必死に一アメリカ留学も企てた。かの安保一然り、もしも、自分と友達になれ なってやってみるといい。どうし「騒動の時某先生と三時間にわたっ」そうな者がいたら積極的に近ずく しかし一度も試みないで卒業する る。クラブをしていない人は、一 小森と一緒にぶつぶついいながら れなくなった。悲しい事である。 はあまり政治的論争が洛尾で聞か 陸上部にもいた。宗教研究部にも 先ず、オーケストラをやった。

さの表現である。しかも今ぼくら一つ。生徒会もやれ縦のつながりが一との六年間、お母ちゃん以外無視しり、幸せである。幸いにも、自分 ノ活動をすればよかった。という。も二人でも自分の先輩や後輩と接しないが、悔いもない。よくやっ。あって行くのである。 ゴタいわずにクラブを盛んにすれ た) 無視されてきた事だ。「何で」を喜ぶと共に、そのような考えを なかったのはこの上なく残念に思るが、その半数にあたる女性を、 感じるものだ。その点ハンドボー 脚するとその学年全体に親しみを

たとすら思う。 もやってやろう」の小生として、 して来た事だ。(マタうそをつい 地球上の人類三十億と言われてい い。しかし、何一つとして満足は 一つだけ大変残念な事がある。

る事だ。はじめはボールひろいか 要は自分にクラブが適している。はなはだ遺憾(?)な事である。 十年の間、その偉大なおヒップに しれぬ。 年は「天国の六年」であったかも しかし数年後より死ぬまで余生五 しかれくらす事を思えば、この六

らくだいをせずに いままでよくもまあ

となってしまった。 んなこともみんな過去の事象とな かったとと、うれしかったとと、 思い出? そう色々ある。楽し

後、二週間余でいよいよこの洛 友人も出来なくなったのである。 も、自分を試そうとした。そして 親の意向でこの学校にはいった。 で衝突が起った。勿論、必然的に し、そういう内にも自分はいつ

うのは正しくない。やろうとして一になるのは親でもなければ妻でも あった。いや、やってきた、とい この六年間、実に色々なことを一そんなのは問題ではない。大切な一に熱中する事である。例えば学校 「何でもやってやろう」の六年で とである。長い生涯に於て、頼り

でもかまいません。手あたり次第

い学會なのだ。この枠内で最大限一分とその人との比較をおこなう。

今試験は、今の様一行します。

▽とのあえず二面新聞を発行しま

るのにしては読まなすぎます。何

ない。喜びや、悲しみを分ちあっ一る。こういったことの根本となっ

ある。クラブ然り、 は作られるのではない、作るので そこに友達の意義がある。友達 生活と密接に関係し合っているの

その他数え上げればきりがなってともあるだろう。しかし、そ こともあれば、時にはお互いを疑 んな中にも、お互いの長所を認め 浜田

ごとにもかけがえのない喜びであって新しくネズミを買って来たらす 思い起させてくれた、この洛星と いう学校を卒業できることを誇り はそれらしき友人を得ていること 洛星を去るに 際して ったが二度目からは、調子よく生 の殻を巣箱の中に入れておいた。 部室をひょっこり訪れた友日で ネズミに栄養補給としゃれてみ卵 「今卵から生れたばかりか」と。

またお目にかかる日まで。

とするのである。

あるが、振返ってみると、瞬く間 六年間と言えば随分長い様では 木村 次大

|導部が注意してくれる。若いんだ| なったこと。それがいまでは、ど | 悔先に立たず」で如何しょうもな | つと深く深く深く更に深く信じて 必要はない、まちがっていたら補一腹の立ったこと、そして泣きたく一あるけれども、今となっては「後 って、過去というベールに覆われ一た一卒業生として確信を持って言 友達というもの」 岩切直次 える事を述べたいと思つ。我々洛 い。それらを十分に為し得なかっやまぬところです。 った感じである。あの時もっと活 「最後のひとこと」 ではお元気でパイバイ

にやって先生にも叱られながら、というと何か奇抜な事をしなけれ そして、友達も出来、喧嘩も適当活が送れるのではないだろうか。 そこで考えたことは、友人という その当然の結果としてあらゆる所 る、といった様な一見何の新鮮味 一見平々担々と歩んで来た。しか一ばならないように聞こえるが、決

分利用するなら素晴らしい学生々 星の生徒はある程度恵まれた環境

が慣習に従って始末書なるものを一で十分だ、ということである。遊 |のは、いかに心を打ち明けること||の様々の行事に参加して学生にし||君も二、三年たてばわかるよる言 が今形成されつつあるという事をけてきた始未。それで後輩の批さ も感じない様な事の中にこそ自分一かにあるべきだったかがわかりか してそうではなく我々が馬鹿げて いると決めつけている校則を守出来るものではありませんでし 葉を測さざるを得ないのです が目立ってつい文句を言ってみた た。それが今になって、やっとい な信念に基づいてやるなどとでも ものはなく、局長となっても明確 しりませんが、一つとして満足な くなりますが、残念なことに、彼 についても、数年間それらに 等自身が新聞もしくは新聞部とい うものの 意義を 自覚 しないかぎ

だと痛感している次第である。 後輩諸君

部での活動を振り返る事にする。 あった。ここでは高ーの頃の生 洛星在学六年、実に色々の事が一 いう見方に対しては嫌悪の情を催

一方、先輩

ことが出来たとしたら、それは何と子供が生れない。話にならんの こうして、長い六年間を通じて り気をつけていた。最初買って来 それが全部雄。ひどいショックだ 別可能になり生れたのを調べたら ぐ生まれた。二週間経て、帰雄判 たつがいの三匹は、待てど暮らせ く子供が生れないかと衄の腹ばか 手に遺伝の実験をしていたが、早 その頃僕は毎日毎日ネズミを相 な時期にいる私達である以上、 ばならないのも、人生のこの特殊 っていて、又一歩から始めなけれ 迷惑だったかもしれませんが、ま が出て行った後には礎石だけが残

一人でも信頼の出来る友人を得る

まだ話しはあるが紙面の都合上省 「卒業にあたつて」 卒業によって洛星での僕達の授 井口

介

れは僕が将来君達の役にきっとた 方が良かろうと思うのである。こ レビを見るよりは入部して楽しむ に合っているか知らないが、何か 頂きたい。勉強しょうと思ってテ 一つでいいから思う存分活動して 後輩諸君、諸君はどんな部が性 業は終りますが、決して僕達は洛 「和」の力の大きさを数えられま に家庭の一員なのです。六年間 した。和によって洛星はここまで 星を去るのではありません。すで

飛びあがり者も多いのです。心の一ている。最後に言いたいのは、自 し、ちっぽけな点数をふりまわすの環境で過ごせた事も誇りに思っ の力を信じて他の物に振り廻され し、畏縮しすぎます。もっともっ られ、痛みつけられ、自分を卑下 る事が出来ません。洛星という選 ない様、気をつけて下さい。しか と力をもっているはずです。自分しり得て欲しいものだ。又先生と生して、色々な事をしでかして下さ ばれた小さな社会の中で圧しつけ って下さい。君達は他の社会を見 な体験を通じて『考える』を養な」は僕にとって最大の欲喜であり思しても、僕は消極的な人間であって 助、勉強、種々の催し等の貴重|他の学校行事に全て参加出来た事|でしょう。しかし、如何なる場合 し下さい。

宗教活動、

クラブ活 皆さん『考える』に留意してみ」え恐怖心で一杯だった。しかし中 における重要な期を有意義に最高

い。今まで幾度新聞を発行したか

最後にひとこと言わして

北川

*

「良きライバル」

て、特に、進歩向上のために最も一が幸いかどうかは我々には判定出 に今日まで生きてとられた。これ なかったのかも知れない。 まれた我々は、 さったのだが、 の様な強烈な生存競争を味わわず と思う。その所為か在校生の諸君 っちかと言えば、温和な者が多い 我々がこの 昭二十年、 **裕星中学校に入学ししたが、今学期中に四面新聞を発** た者も少ない。ど その人数も少なく 丁度終戦の年に生

奥で通い合つ暖かみを持った人間一分が入学した学校には他の中歩は

になって下さい。この為にも本を

です。そもそも、クラブ活動が学一常に真摯な態度で一義的な活動の一の時には最大の笑顔で卒業出来る 思った時卒業という
ととになるの
広い人間になってほしいのです。
の喜怒妄張を味わい皆んなも卒業
勿論その尺度は の役割は果せている訳です。そう。が、実際僕がこうでないからこん 校教育の一環として人格教育のた | 出来る人間に なって ほしい ので す。下さい、下さいばかりです 様にしようではないか。

数日前に カンジルコト 猪木

たいことを言い、最後まで詰らない。角をためて牛を殺すなんての 実として認めないわけにはいかな一達に少しでも考えていただこうと いのです、どうぞよく考えておい一大上敗にふりかぶってみたので いことを言ってしまいました。御はいけません。君達そして僕達そ 六年間新聞を通したりして言い です。それを大いに利用して下さ では洛星の学園よ、ありがとうる発展なのです。僕達は「和」と す。実に洛州には良い点が多いの るのです。卒業にさいしてただ君 な物をさがして巣立たんとしてい 知りません。今、洛星で得たエネ ルギーを基に次の段階へその大き して洛星関係すべての人々、一人 来た時はあたたかくむかえて下さ ます。又、家へひょっこり帰って 一人が発展した時、洛星の大いな も、矢のように飛びさった空虚な「アイトを燃やすのでは決してな」と思う。 なければ偉くなったのでもないか。ている劣等感、 ずるつものはむろんありません。 でありました。僕は今その一日一 は重大な意味をもっているので だからこそ、僕にとってこの六年 それほど自分は年を取ったのでも 日の様々のこまかい思い出を懐古 す。実に真新しい生活の長い連続 六年でもありませんでした。それ らです。若い僕等には、この夢の 続きを見る権利があるのです。そ 僕にとって「卒業する」という

「卒業に際して 吉川 順介

変った事がこの学校に起るわけで

言うこともないと思います、別に

きな理想をいだく理想主義者なのかったという念が圧倒的に満ちて をかいてはいけません。我々は大一今卒業に際し洛星に育った事は良し、まずないでしょう。「洛星」 れからが洛星の羽ばたく時代なの一験したごとく始めは堅苦しく校 です。基礎造りは終りました。と一不足はない。その生活は皆んな経 になったのです。しかし、あぐらを受け運よく入ったのだ。しかしそうですし、学校が倒産すること なく、ただ両親の意のままに試験 僕が洛星に入学した深い動機は 本当にめでたいことです。 がいます校舎もここ数十年は勿論 もないのです。僕等の後には後輩

後輩諸君には大いに学年交換をや よく どうか 大いに体を 動かし あった。口惜しいのは学年上下の一れた陰気な傍観者であってはなら も洛星生活の素晴らしい楽しみで | ず自分の墓穴を掘るようなひねく ーから高量までの各学年旅行及び一あることです。色々な事がおこる 長、補導部の先生方は鬼の様に思 い出である。茶道部で活動した事。はならないと戒めています。たえ ないと思うのです。後輩の諸君 ありますが、これは非常に興味の い。では、サラバシ さて洛星を去って、我々はいよ

いよ正式に社会の中に立つわけでり、相互の進步向上に加速し合う とに努めるべきである。 的にしろ、良きライバルを得るこ を認めたから ようなゴールのない競争の必要性 自身も相手の 否定できないし、又それを否定し ライバル意識が真に純粋な競争心 ょうとも思われ い。」と言われれば、私はそれを とにかく、 「卒業に際して」 である。 良きライバルとな 一方的にしろ、相互 はい。何故なら、私 くれるものではな 川直昭

集 後

記

は

重大な年令にある我等若人にとっ | 来ない。しかし比較的自由に洛星 | 力を借りずに中■の局員だけで発 での六年間を過ごせたことは事実一行しました。何しろ慣れないもの 我々が全然気にし|忠告しに来て下さい。 先生方は厳しくな

一ですからお気付きの点は新聞局へ しました。又今号は高ーの局員の ▽今号は第七期生卒業記念特集と

その比較の中から劣等感、優越感一問であり、その程度も今時のもの れば、全く意気消沈としてしまうが、今日の様に受験校としては有 じた時、意気軒昂として大いにフ|に思う。また、当時洛星は規律正 が生まれてくる。この劣等感が生一に比べれば、低いものであった様 てられる場合もあ 自分自身であり、 一な筆記試験ではなく、全て口答試 名でなかった。しかし、我々の先 しい学校としては有名であった

| 切ます。しかし決して、この六年 | あくまで自分の進步向上のためで | 知らない人が余りにも多いのは、 なものかと繋ろいている次第であール(?)とするのであるが、無論|的たる人間教育の徹底という面を は夢のように過ぎ去ったものであり、彼の足を引っぱるようなフー今後君達に残された大きな問題だ 「時のいたずら」とは、かく滑稽一る。即ち前者の場合を良きライバーる。しかし、この学校の本来の目 イバルの品定めをしてきたのであ。まって来たのは喜くばしい事であ 意識を持っているか否かは別問題の学校を去らねばならないが、我 い。又、彼が私に対してライバル この二つの場合を尺度に私はラ | 輩のお蔭で受験校としての名も高 我々第七期生はなす所なく、と

じその劣等感があきらめの感情に なのである。又逆に、劣等感を感々の今までの言動の中に、何かと っておきたいのは、今ここでいっ 変ってしまうような相手即ち後者 (ととで一言ととわ ルとして不適とす 優越感という言葉 功とを願って止まない。 行して下されば幸いである。 認めたなら、それを引き継ぎ、実 の学校の発展の為寄与するものを 今後の洛星の発展と、君達の成

るのである。

の場合はライバ

思い出の エツセンス 中川 義之

情を含ませてはいないということ

に対して私は決して酔い不潔な感

とを意味しているのである。) 対する純粋な競争心の始点と終点 である。あくまで私はライバルに しかし、「このように一方的な」つどこから生まれたのかは知らな ってくれよ。一自由の学園よさら まにか洛星に入った。(人)しよ い。いつのまにか生まれていつの 迷。今は図々しくも最も深い自己 ると余計に青い鳥を求めた。仮装 るやつの仲間に入ろうとして自意 々七期生は一つの大きな試練の上 戻さねばならない。その意味で我 った。質実剛健の気風は洛星が取 がどうのこうのいえる身分。大き を与え給えとか。その頃の数年間 行列に曰く、全能の神よ我に満点 で信者を夢みた。勉強がいやにな にたっている。頑張ります。頑張 る自分である。六年間、自由であ くなろうとして細かい事をしてい 人生のジンクス反抗期、精神的低 識が芽生えた。かわいらしい気持 よくまあ今まで生きたなあ。い